

第 159 回研究例会「日本統治下台湾の能・歌舞伎・浄瑠璃興行をひもとく」発表要旨

趣旨説明・日本統治下台湾における演劇興行の研究と課題（中尾薫）

要旨：

本シンポジウムでは、日本統治時代の台湾における、能、歌舞伎、浄瑠璃興行史を構築するために、「内地」の演劇事情とどのように絡み合うのかという視点で、読み解いていく。そのために、同時代の「内地」の演劇状況を概観したうえで、これまで諸研究によって明らかにされてきた、日本統治下台湾の文化政策、劇場、新派劇、新劇、劇文学映画の状況について紹介する。また、朝鮮・満州など他の統治地に関する同様の研究成果をも可能な限り紹介しながら、本シンポジウムの趣旨と論点を提示していく。

日本統治下台湾における能楽（王冬蘭）

要旨：

1895 年から 1945

年まで半世紀に及ぶ日本植民地統治時代の台湾において、能楽は日本人社会で展開された。例えば、能楽上演も行われ、能舞台も作られ、能楽社中も台北、台南、高雄等各都市で数多く組織され、絶えず稽古展開された。また、『能海』という能楽雑誌も現地で刊行された。台湾における能楽は、観世流、喜多流、宝生流という三流により行われたが、金春流、金剛流の活動はほとんどなかった。上記の三流の指導者が台湾能楽展開にとっても大きな役割を果たした。本報告は各流の主な指導者の活動地域、時期、各流の主な社中、倶楽部の概況、能楽上演の状況、三派連合して上演した事情などについて報告する。

日本統治下台湾の浄瑠璃巡業と素人浄瑠璃（川下俊文）

要旨：

浄瑠璃（義太夫節）は素人（アマチュア）の稽古事として広く親しまれ、日本各地で連中が組織されていた。明治以降、日本人の海外進出に伴って、外地でも素人浄瑠璃連が発生し、玄人（プロ）の外地巡業が行われる下地となった。浄瑠璃の外地巡業としては、明治を代表する名人として知られる三世竹本大隅太夫が、大正 2 年（1913）に台湾へ巡業して客死した一件が有名である。裏を返せば、当時の台湾には、大隅太夫に巡業を決意させるほどの浄瑠璃愛好の地盤が存在したわけである。本発表では『台湾日日新報』等の調査によって、台北の素人が大隅太夫を招聘した経緯を明らかにし、外地における浄瑠璃受容の様相を知る手がかりとしたい。

日本統治期台北の歌舞伎俳優の来歴について（日置貴之）

要旨：

日清戦争後の日本による台湾の植民地化の中で、台湾でも日本演劇の興行が行われるようになる。当初、その多くは旧劇（歌舞伎）であった。台北において明治36年（1903）頃、新聞紙上に台北の劇場に出演する俳優に対する評などが盛んに掲載されるなどの動きがあったことは先に報告したが（日本演劇学会2020年秋の研究集会）、個々の俳優の出自や内地における経歴等については未検討の点が多い。本発表では明治期の番付等興行資料に基づき、彼らがどのような俳優であったかを紹介し、内地における出演状況と台湾での活動との関係等について考える。

* 本シンポジウムは、JSPS 科研費（18K00234）の助成をうけたものです。